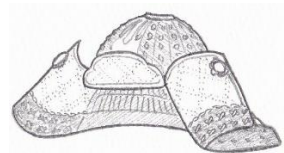


鎌倉権五郎と五領ヶ台

— 平安時代後期 —



「いよいよ初陣ういじんだな。おい五郎、おまえぶ振るふるえているんじゃないか」

「武者むしやぶ振ふるいといいったやつさ。ぜこったうい功名こうみやうを立てたててやる。平太へいたよ、どどちらがちらが多おくの敵てきを倒たすか競争きさうだ」

鎌倉せんこう権五郎ごんごろう景正かげまさといいとこの三浦みうら平太へいた為次ためつぐは、鎧兜よろいに身みを固かめ、馬うまにまたがり、戦場せんじやうを目指めさしていました。まだ十六歳じゅうろくさいです。

永保三年（一〇八三）、奥州（東北地方）で戦争が起こります。陸奥守（東北地方の長官）であった源義家は、関東の武士たちを引き連れて奥州へ向かいました。

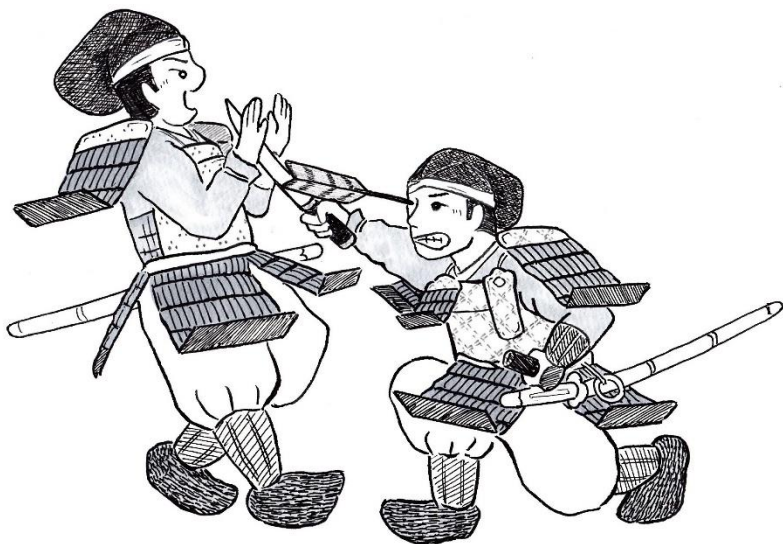
金沢の柵（現在の秋田県にあった古代の城）での戦いときです。一本の矢が、景正の右目を貫きました。激しい痛みが走ります。

射たのは、敵将の鳥海弥三郎です。

「おのれ」

景正は、刺さった矢を抜こうともせず、弥三郎を追いながら立ちふさがる敵につきつき矢を放ちました。ついに弥三郎を射程に捕らえます。放った矢は、みごとに命中し弥三郎を倒しました。

その後、いったん自分の陣地に戻った景正は、兜を脱ぐと同時に倒れ込みました。矢は目に刺さったままです。



「やられた」

「大丈夫か。いま矢を抜いてやる」

そう言ったのは、為次です。

矢は深く刺さっていて、容易よういに抜けそうもありません。そこで、為次は、刺さった矢を握り、靴くつを履はいたままの足で景正の顔かほを踏ふんで抜こうとしました。その時です。

景正は刀を抜いて、為次めがけて突きかかりました。

「何をする」

為次は、おもわず飛びのきました。

「矢にあたって死ぬのは、武士として望むところ、だが、生きながら顔を土足で踏まれるのは、がまんがならない。そのようなはずかしめを受けるのなら、おぬしを刺して、俺も死ぬ」

「それは俺が悪かった。許してくれ」

そういうと為次は、ひざを折つてかがんで、手で顔を抑えて、刺さった矢を抜きました。

この話は、多くの武士たちの知るところになり、景正の名は大いに上がったのです。奥州での戦争は、四年も続きました。この戦争を後三年の役といいます。

戦いが終わって、故郷に帰った景正は、土地の開拓に汗を流しました。荒れ茂った野の木を切り倒し、根株を掘り返し、大小の石を取り除き、そこに水を引き入れて田んぼにします。春に稲の苗を植えれば、秋には米ができます。こうして実り豊かな土地を広げていきました。

「この土地は、われらが苦勞して手に入れたものだ。命に代えても守らねばならぬ」
景正の領地りょうちは、元々は現在の鎌倉あたりでしたが、藤沢や茅ヶ崎あたりの土地も開發していきました。平塚でも、豊田や広川あたりは彼の領地だったようです。

豊田は、彼の子孫の豊田氏が領主となりました。

広川の善福寺ぜんぷくじは、景正が建てたと伝えられています。善福寺のある高台ごりようがは今、五領ヶ台だいと呼ばれています。が、「五領」は権五郎の「五郎」がなまったものだともいわれています。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸